

Title	南島説話, 佐喜眞興英著
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1922
Jtitle	史学 Vol.2, No.1 (1922. 11) ,p.147- 148
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19221100-0147">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19221100-0147</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

崇拜の關係を論じ、第八章には氏が大小二方面に發展進化せると、則ち一は漸次擴張して多くの姓族を包括し邦國を有つもの、の號となりたること二は血族團體の支派を氏と稱するに至つたことを説いて終つてゐる。

以上の所説の中疑問と思はれる點を列擧すれば氏が、「氏」字と「民」字との關係を述べられしもの兩者を連絡すべき何等の積極的證據をあげられざりしことであつて、教授は殷代文字と稱せられし匱室殷契類纂にあげられし「氏」の古體を如何に説明せられるのであらうか。同文字が果して「氏」字ならば疑問なるも免も角「民」字の古體と大なる相違を有するのである。第二に「氏」は主として地名又は君長の名より起ると云はるゝがその證として青陽氏等の名稱をあげらるゝは時代の先後を考へられざる議論ではなからうか。何となれば青陽氏の名は比較的後世に生じたる神話的人物の名であつて之をもつて氏の源流を窺ふことは難いのである。第三に姓が母系の生身の標識なりと説かるゝも、姓が果して母系と關係ありや、單に感生傳説をもつてその理由とせらるゝはあまりに薄弱な證據ではなからうか。又姓が女生の合文よりなれるが故に母系生身の標識なること明瞭なりと云はれるも周人が女子のみ姓を稱せし慣習を有せしことよりも説明なし得るのである。第四に支那の原始的姓は母の所在の地名により起れるもの多しと云はれるも神農氏、姜水に長じて因つて姓となすと云ふ傳説の如きは趙宦光の六書長箋に姜字を説明し、水姓によりて名とす、故に女に従ふ。もし水先づ姜を名とせば女に従ふは何ぞやと論じたるが如く、(中井履軒の履軒漫錄にも同種の事を

論じたり)後世生じたる傳説の如く思惟せられるのである。第五に國語に表れたる季子の言をひき同徳同姓の説をなし、姓が徳の異同を表示するに用ひられたりと云はれるが、この觀念も比較的後世の哲學的思考の所産と考へられ、如實に存在せるものとは考へられぬのである。第六に三皇五帝の傳説をもつて、姓の變遷を説かれるも之もあまりに時代の先後を無視せられし觀あり。本傳説の如きは要するに戰國末漢初の産物に過ぎないのである。第七に「氏」は一面次第に擴張して邦國を有つもの、號となりたりと云はるゝもその例として伏羲氏神農氏軒轅氏等の名をあげられるは是等の氏名が漢代に生ぜし神話的古聖王の名なる事を信する吾人にとつては甚だ不徹底に感ぜられざるを得ないのである。

以上は通讀せし、その疑問を書き記したのみであるが教授の御示教を得れば幸とする所である。(松本信廣)

### 南島説話 (佐喜眞興著 郷土研究社發行)

著者は昨春帝大法科を出られたる新進の士、その郷國琉球中頭郡宣野灣村地方の口碑を集めたるが本書である。世のはじめより、神婚傳説、動物と交情の話、人間が動物になつた話、動物に関する話、植物に関する話、妖怪話、神威の話、傑出した人々の話、鬼、餓鬼、盜賊の話、不思議な出世話等に分けて民話を採集してある。琉球の民俗の研究が日本の民間の風俗と南洋方面の土俗との關係を示す樞であることは申すまでもなく、例へば著者がホリネ

シア人の神マウイに比較したアマンチニーが天地をおし開いた開闢説話の如き、宮古島の人が犬の兒であるといふ傳への如き附近諸國の古來の傳承と比較すると興味津津たるを覺えるのである。著者がその繁劇なる實務にたづまはる間に琉球の研究に従事せられつゝあるは感謝すべきであり、なほ將來同地方の古代宗教法律政治の各方面に就て研究を公けにせられ琉球が學界に對して有する學問的使命を遂行せられんことを望んで止まざるものである。

### 江刺郡昔話

(佐々木喜善著)  
郷土研究社發行

遠野の佐々木君が、淺倉利藏と云ふ炭焼きの人から聞いた民話を大體の骨子として編まれた江刺郡昔話集である。「或所に爺と婆とあつた。」といふ様な話を「昔話」として最初に載せ、その次に致富傳説、道祖神の由來、飛んだ神の話と云ふ様な小話を「口碑」として載せ、最後に狐に化された話と云ふ様なやゝ現實に近い種類の話を「民話」と云ふ綱目の本に載せてある。此三種類の綱目の分け方は一寸そぐはな感じがするがあつめられた説話は實に興味あるもののみである。殊に面白く讀まれたのは著者の「江刺を歩き」云ふ感想文であつて、著者が五輪峠の雪を踏んで江刺郡に入り、蘇民曳を見たり、鴉神社に詣つた記事が鮮かな地方色を讀者の前に展開する。英國の學者が最近フオークロアの使命は民衆の生活を如實に描き出すのにおりと云つた。さういふ新しい立場に立てば著者の様に説話の語り語られてゐる人々の生活に深い同情理解を有しその氣分をしつくり描き出すことの出来る様な人は實

に羨むべき地位にあると云はねばならぬ。集められた民話は、もとより一部の人々から見れば無益なものであるかも知れぬ。然しながら此山間の深谷に幾百年の閑生息した人々の賑みや懐びが此等の説話の中に滲透してゐる様な氣がする。東北に生れ東北に育つた著者の様な人が單に江刺郡のみならず東北全體の各郡の民間傳承を尋ね歩かれたならば極めて有益なる收穫がもたらされる事だらうと思ふ。さういふ企てがかつて計畫され、所謂學者階級の無理解によつて挫折したのは惜むべきことである。現代日本は皮相な西洋文物が急速に蔓延しつゝある時代である。やがて吾人がかゝる状態から日覺め、日本の眞の文化を建設しやうとするときその根柢となるべきもの日本人の國民性はけして最高學府の博士達の作られた國民性十講などと云ふ様な本の中から發見されはしない。否純な形で農民の間に残つて居る説話詩歌等の中にかへつて燦然たる光を放つてゐるのである。此意味に於て數世紀の後に今日等閑視されてゐる民俗學者の著作物が日本人の尊い遺産と考へられる時代が來やう。吾人は待ち遠しいが次の時代を自指して勞作してゆかねばならぬのである。

### 祭禮と世間

(柳田國男著)  
郷土研究社發行

有形的物質を研究する物理學と無形の精神的所産を研究する民俗學とがその研究範圍の纏張り争ひをしたのが本篤である。仙臺鹽竈神社の神輿が町内を暴れ廻り民家を破り警察署に亂入した事件を東北大學の日下部博士が、物理學的に解釋し、二つ以上の力